

# ゼミ生お薦め! わが師の新刊 『自己形成の心理学』

—他者の森をかけ抜けて自己になる—

世界思想社  
2,100円



読者  
プレゼント  
2名

溝上慎一 著

私たちは、「自分自身について考える」ということをする。大学生にもなると、サークルでの人間関係、バイト先での仕事を通じてのやりとり、旅行、恋愛、就職活動…などなどいろいろな時、いろいろな場面、いろいろな仕方で「自分自身について考える」ようになる。それで真剣に悩むときもあれば、ただふと頭をよぎるだけというときもある。心理学は、こうした心の動きを理論の対象としてきた。「自己」は、カウンセリングや臨床心理から学習、実験、認知までひろく心理学共通のテーマとなっている。さて、その自己の理論書が本書である。

著者は、副題に興味をひくフレーズを持ってくる。たとえば、『現代大学生論——ユニバーシティ・ブルーの風にゆれて——』（NHKブックス）もその一つ。本書の副題——他者の森をかけ抜けて自己になる——は、想像力を広げることを助けつつ、簡潔に本書の内容をまとめ上げることにも役立っている。簡単に紹介すると、本書は大きく二つのユニットからなっている。前半は、赤ちゃんが自分と他人との関係をどう形成していくかを心理学の知見を理論的に整理しつつ展開している。自己に関する「発達」の議論。これに引き続く後半は、著者が専門フィールドのひとつにしている青年期を吟味している。自己の「形成」の議論。

現在の青年期は、ものすごい勢いで変化する社会とのかかわりぬきでは考えられない。そこで人は、“さまざまな”人間関係で、

多様な世界観・価値観、出来事のあいだを動く。動きつつ、“さまざまな”私を形成する。現代社会では、一貫して自立的な幹のような私がこういった“さまざまな”私を統括するというようなコントロールタワーの役割を果たせない。複数の私それぞれ勝手に自己形成しているのだ。こうなると、ある「私」から見たときにそれ以外の「私」が邪魔になったり、無理難題を出して困らせたりする。同じ「私」なのに……。[いろいろな私がいるよね♪]ではすまないことが多い。この困った事態を説明していくのが、後半の——そして、本書の——目玉となっている。

これ以上の紹介は難しい。というのも、この本を読み抜いて、どんな「私」を形成するか、そこでどんなめぐりあわせがあるか、どんなふうには森を歩くか、迷うか、それはそのひとによって“さまざま”なのだから。

京都大学大学院教育学研究科M1 河井亨

